

電力土木の歴史－第2篇 電力土木人物史（その1）

正会員 稲松技術士センター 稲松敏夫（技術士）

History of Electric Civil Engineering
－Part II History of Electric civil Engineer－

by Toshio Inamatsu.

概 要

筆者は先に第1回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に、各河川の水力開発の変遷について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。今回はその中25名の人の業績を詳述して第2篇 電力土木人物史として発表する。（明治～昭和期、電力土木、開発した人）

（Ⅰ.分類、人物史、Ⅱ.分類、河川、エネルギー）

1. はじめに

電力土木 100年の歴史のうち、電力土木人物史にとりあげるのは次の25名と考えている。

(1)知久清之助 (2)伊藤令二 (3)内海清温 (4)北松友義 (5)鶴飼孝造 (6)和澤清吉 (7)大林士一 (8)市浦繁 (9)高桑鋼一郎 (10)久保田豊 (11)吉田登 (12)中村光四郎 (13)山本三男 (14)味埜稔 (15)足立正俊 (16)平井弥之助 (17)水越達雄 (18)大橋康次 (19)浅尾格 (20)大西英一 (21)永田年 (22)徳野武 (23)野瀬正義 (24)岩本常次 (25)目黒雄平

2. とりまとめにあたって

25名の人物史をとりまとめるにあたって次の様に多数の方々の御協力を得た。あつく感謝致し、心からお礼申し上げます。

1) 御家族、御親戚の御協力

電力土木人物史にとりあげた方々の中、2世として電力土木並びに土木関係に献身している方が多い。例えば、(1)知久清之助の6男知久徳氏（東電設計取締役）(2)伊藤令二の長男伊藤学氏（東大名誉教授、埼玉大学教授）(4)北松友義の3男北松治男氏（東北電力常務取締役、東北開発コンサルタント社長）(12)中村光四郎の女婿

菅野孝夫氏（サンコーコンサルタント常務）(13)山本三男の長男山本健氏（中国電力土木部次長）(18)大橋康次の女婿梶山義夫氏（北海道電力常務）(20)大西英一の長男大西一央氏（日本原電常務）等の御協力を得た。

2) 自叙伝又は随筆等を書かれている方が多い。例えば(1)知久清之助 (2)伊藤令二 (3)内海清温 (4)北松友義 (9)高桑鋼一郎 (14)味埜稔等で参考にさせていただいた。

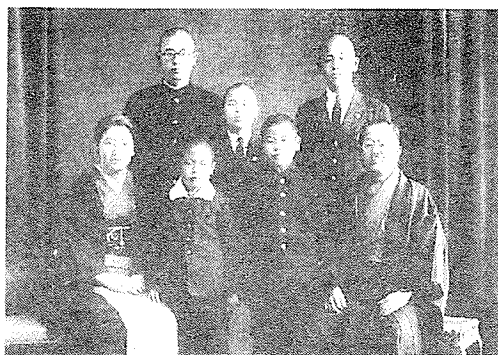
3) 電力土木技術協会が昨年水力百年記念事業として発刊された水力技術百年史を参考にさせていただいた。

4) 10年間にわたり毎年、全国各地を資料収集の為廻った際、各地の方々から資料並びにお話をおきしたのと同時に多くの先輩方に直接面談して得た貴重なお話をもとにして、前回の第1部各河川水力開発の変遷及び今回の第2部電力土木人物史をまとめ得た。直接面談をしていただいたのは(2)伊藤令二 (3)内海清温 (4)北松友義 (9)高桑鋼一郎 (5)鶴飼孝造 (6)和澤清吉 (7)大林士一 (8)市浦繁 (10)久保田豊 (11)吉田登 (14)味埜稔 (15)足

立正俊 (16)平井弥之助 (17)水越達雄 (18)大橋康次 (19)浅尾格 (20)大西英一 (21)永田年 (22)徳野武 (23)野瀬正義 (24)岩本常次 (25)目黒雄平と25名中22名である。大部分は故人となられたが、生前、直接、間接に御指導をいただいた方々である。

3. 人物史

1) 知久清之助



昭和13年1月 家族揃って

イ) はじめに

昭和62年12月私は関東地方の水力開発の変遷を纏めるに当たり、知久徳氏（東電設計(株)第一土木本部長、前東京電力(株)建設部部長）をお尋ねして、父知久清之助（東京電灯(株)信濃川発電所事務所長）自伝及び東京電力三十年史外多数の資料を借用し、それらを参考にして取纏めた。お借りした知久清之助自伝は、原稿用紙に綺麗なペン書きで、選暦を記念して丹念に生涯の記録をまとめられた原稿を徳氏が保管されていたものであった。その後1990年（昭和64年）8月徳氏が父の自伝の原稿を1年がかりでワープロで活字化し、印刷製本して刊行された苦心の自伝をいただき、本稿は父清之助氏の自筆の自伝と六男徳氏の製本、刊行された父の自伝を参考にまとめたものである。

ロ) 知久清之助の年譜

明治19年 5月 徳次郎、クニの二男として誕生
（栃木県野木村、東北本線古河駅近く）
明治35年 4月 東京郁文館中学入学
明治40年 9月 第一高等学校二部甲類入学

明治43年 9月 東京帝国大学工科大学土木工学科入学
大正 2年 7月 東京帝国大学卒業
大正 2年 9月 東京倉庫会社神戸支店建設部入社
大正 3年12月 三菱神戸造船所土木課入社
大正 4年 5月 梅野梅と結婚
大正 9年 1月 猪苗代水力電気株式会社入社
大正12年 4月 東京電灯株式会社に合併入社
昭和 2年 2月 東北電力株式会社入社
昭和 3年12月 東京発電株式会社に合併、入社
昭和 4年12月 六男 徳 誕生
只見川筋調査実施
昭和 6年 4月 東京電灯株式会社に合併、入社
昭和 7年 6月 台湾総督府交通局に入局
昭和 8年 4月 台湾移住
昭和10年 4月 東京電灯株式会社入社
一家台湾より引揚げ
昭和11年10月 信濃川建設事務所副所長
昭和14年 信濃川第一期工事完成
昭和15年10月 蘭印出張（三ヶ月間）
昭和15年12月 建設部土木課長兼信濃川建設事務所所長
昭和16年 9月 仏印出張
昭和17年 4月 仏印調査より帰社
日本軽金属入社
昭和17年 5月 猪苗代湖低下工事竣工
大井川視察
昭和18年 5月 昭南に赴任
佐野川起工、箒川視察
昭和18年11月 スマトラに赴任
昭和19年 5月 ジャワに赴任
ジャワ軍政監部兼ジャワ電気建設電力部長
昭和20年 6月 ジャワより昭南へ
内地帰還（佐世保上陸）
昭和20年 8月 終戦
昭和20年11月 陸軍臨時囑託解除
昭和21年 1月 鎌倉転居
昭和21年 3月 日本軽金属退社
昭和21年 5月 還暦
自伝原稿執筆を始める。
昭和22年 鎌倉彫入門

昭和23年 5月 東京転居
昭和24年 4月 竹内建設株式会社入社副社長
昭和26年 8月 狭心症にて死亡
享年66才

ハ) 猪苗代水電時代 (大 9.1-大12.3)

社長 仙石貢(鉄道大臣となる) 部長 井上秀二のもとで吾妻出張所長として、猪苗代第3、猪苗代第4 発電所の建設を担当した。
檜原湖々面低下工事にも挺身した。

二) 東電建設部時代 (大12.4-昭 2.2)

建設部土木係長として、関東大震災後の山梨県桂川水系復旧工事を担当した。
社長 神戸挙一、副社長 若尾璋八、建設部長 広瀬為久、建設部副部長 井上秀二、土木課長 神原信一郎氏の指導を受けた。千石社長は東電相談役となった。当時の建設部土木課関係の仕事は、利根川水系上久屋発電所建設中、信濃川水系関山発電所の着工準備、猪苗代水系の第3、第4 発電所調査設計、利根川水系の栗沢地点、岩本地点、赤谷川地点、島川地点等の調査、設計等多忙であったが大正12年の9月1日の関東大震災により調査方針を変更した。ついで関東大震災の山梨県桂川の各発電所(ハツ沢、駒橋、谷村、鹿留等)の復旧班(班長奥村筒二)として活躍した。
さらに、上久屋発電所の竣工、関山発電所の着工、13年猪苗代第3、猪苗代第4 発電所の同時着工、猪苗代送電線、及び花畑及び萱付変電所の建設並びに千住火力発電所(5万kW)の建設等大正15年それぞれ完成した。

ホ) 東北電力時代(東京電灯傍系)(昭 2.2-3.11)

社長 酒井伯、副社長 河西豊太郎、専務 田辺七六、建設部長 奥村管二で福島県野沢発電所主任として、高橋清蔵技師を次席として、野沢発電所建設及び沼沢沼揚水発電所の調査を実施した。

ヘ) 東京発電時代(東京電灯傍系)(昭3.12-6.3)

東京電灯は傍系の東北電力及び信越電力並び

に関東水力の三社を合併して東京発電(株)を創設し、社員は全部新会社に引継いだ。知久清之助は理事に任ぜられ建設部調査課長を命ぜられた。

社長 小林一三、副社長 河西豊太郎、専務 田辺七六、及び八巻弥一、建設部長 多田耕三、建設部次長 奥村管二、土木課長 大島満一(知久氏と同級生)、調査課長 知久清之助、土木課副長 加藤貢(知久氏の2年後輩)であった。土木課は信濃川地点の建設担当、調査課は、只見川地点の許可促進業務を担当した。

ト) 東京電灯囑託時代(昭 6.4-7.6)

発電計画課勤務。東京発電(株)が解散して東京電灯に合併されたので、残務整理の為、東京電灯囑託として勤務した。不遇の時代であった。

チ) 台湾時代(昭 7.6-10.4)

昭7年6月東電囑託森忠蔵氏より台湾行きを奨められ、熟慮の結果、東電重役の了解を得て、依願解職となった後、之に応じ、直ちに赴任の途についた。

台湾電力(株)日月潭水力発電所工事監督として、総督府交通局通信部の囑託として赴任した。3年間日月潭発電所10万kWの完成に努力した。台湾電力建設部長 新井栄吉、日月潭建設所長 石井林次郎、土木係長 品川善次郎で全線を六工区に分け、それぞれ工区主任を置き、各工区とも当時着工していた。

総督府側の監督組織は、森忠蔵を首班とし、現場駐在員は森田利吉(日月潭貯水池の土堰堤監督を専門)知久清之助(トンネル及び発電所等全線、毎月3回程度巡回監督)の2名であった。昭和9年10月発電開始した。

その後、台湾各地の新規開発地点の調査計画を担当した。

リ) 東京電灯信濃川水力発電所建設事務所長時代(昭10.4-15.12)

東電副社長 河西豊太郎の招へいで台湾を引揚げた。東京電灯信濃川水力発電所建設事務所副所長(後に所長に昇格)となった。

大島満一は小野川発電所建設事務所長(猪苗代湖

方面)、加藤貢は本部の土木課長となった。信濃川建設所長は三野熊雄建設部長の兼務、副所長 知久清之助は、次席技師 古川運造等と現地調査、請負付託等に専念、昭和11年11月1日に着工した。17万kWを一期工事、二期工事に分けて、一期工事昭和14年11月竣工、二期工事昭和16年4月竣工。請負は飛島組、大林組、水門石川島、鉄管 三菱重工業、建物鉄骨 横河橋梁、水車はホイット社、発電機はA. E. G. 主変圧器は芝浦製、屋外変電所は富士電気で施工した。トンネル延長23km。昭和16年信濃川発電所の設計、施工に新機軸をだし、発電事業に功労ありたりとなし、電気学会より、大島、加藤両氏と連名で表彰状並びに金一封を又同一の理由で、日本発明協会より賞碑及び表彰状を受領した。

ヌ) 蘭印出張(昭15.10-15.12)

小林一三商工大臣(前東電社長)の要請で、新井社長、安藤副社長、佐藤部長より蘭印出張の命を受け、山口直樹を随行、日経金常務、上島清蔵の指揮を受け、電源開発の調査を実施した。セレベス島トウチ湖のラロナ河の発電計画並びにスマトラ島トバ湖のアサハン河の発電計画等の踏査を行った。

ル) 東電土木課長時代(昭15.12-17.3)

東電土木課長大島満一、朝鮮の黄海水力電気会社の技師長兼重役に転出のあと、知久清之助が、東電土木課長に任ぜられ、猪苗代湖面低下工事を推進。16年2月着工、建設事務所長は小野口貞技師であった。請負は飛島組で施工した。昭和17年5月竣工した。信濃川、小野川、秋元各発電所の従業員とも、日本発送電株式会社に引き継がれる事となった。

オ) 佛印出張(昭16.9-17.4)

日佛共同で佛印の産業資源開発の為、調査団を派遣。調査団は鉱業、農業、水産、林産、綿業、糖業、水力等十数班に分かれ、調査員二百数十名の大団体で、知久清之助は水力班に属した。水力班は逓信省電気課の弘山技師を班長とし、逓信省水力課の岡崎技師、日発会社の宮川

技師と東電の知久技師の4名で外に助手2名通訳1名の総員7名から成っていた。調査地点はハノイを中心として、トンキン地方のルージ河(紅河)、クレール河(清河)の諸地点を始め、アンナン地方のサムリン、ユエ等を中心として付近の数河川を調査し、一部ラオス地区にも出入りした。さらに、サイゴンの近くで数ヶ地点を調査した。また、メコン河を遡り、ラオス地方に入り、コーンの瀑布(タイ国側)、プノンペンより大湖(グランラック)を視察、昭和16年12月8日の米英との開戦の報はこの時ラオカイで聞いた。

ワ) 日本軽金属(株)電力建設部長時代(昭17.4-18.9)

17年4月佛印より帰るや日本軽金属(株)電力建設部長として東京電灯(株)の安蔵副社長の推薦で入社した。日本軽金属(株)はその有する富士川系三発電所の総出力10万キロを総べて、自社の蒲原工場のアルミナ電解に消費していた関係上、自家発電所として保有し、更にその工場拡張計画に伴い、その水利権を持っていた大井川上流井川地点に発電所を開発する為に入社した。

大井川、井川地点及び新潟県三面川の水力開発調査計画と富士川筋の既設、波木井、富士川第一、富士川第二の総出力10万kWの補修及び増強建設工事を着工(3,000kWの佐野川発電所工事)を推進した。

カ) 南方勤務時代(昭18.9-20.8)

日本軽金属(株)、昭南支社長代理として昭南島に勤務。昭和19年5月ジャワ電気事業社建設局長(関東配電会社の傍系会社、社長は佐藤稔徳氏)として、ジャワ島の水力発電所の建設、調査に従事した。

大東亜戦の進展と共に、アルミニウムの需要は漸次増加したが、其の資源は主として、南洋旧蘭印ビンタン島のボーキサイトに依存して居たので、若し現地でボーキサイトをアルミナに製造して内地に搬入すれば、船腹は正に半分で足りる事となり、又、貧鉱処理にも便利となるので、昭18年夏、日本軽金属はビンタン島に差当たり年産10万トンのアルミナ工場を建設すると同時に当時日窒会社よりスマトラ島で建設に着手していたトバ

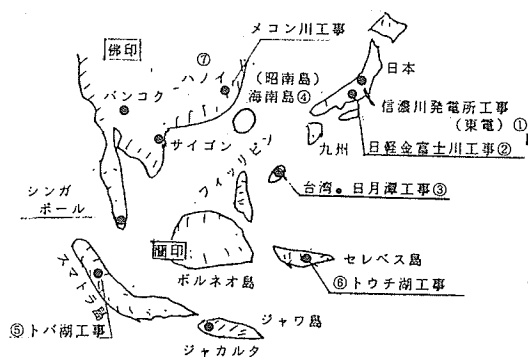
湖を水源とするアサハン河の水力発電所の電力を利用して、スマトラ島に年産2万トンのアルミナ電解工場即ちアルミニウム製造工場を建設する為に、昭南支社を創設し、支社長 西田伝五郎博士（清水のアルミ工場長）、知久清之助は参与に任ぜられ、支社長代理を命ぜられた。昭南市のビンタン島の工場建設事業及びスマトラ島アルミニウム工場建設並びにジャワ島の10ヶ所の水力発電所の調査、建設及び2ヶ所の火力発電所の移設工事、送電線の建設等に挺身した。

ヨ) 20年6月、昭南より帰還。21年3月、日本軽金属(株)依願解嘱。

26年8月15日 狭心症で死去。66才

タ) 私の知久清之助観

電力土木に一生を捧げた人々の中第1号に知久清之助を選んだのは、東京電力の信濃川建設工事を始め日本国内の水力開発の歴史の一時代を作ったと共に、世界大戦時代の台湾電力日月潭工事、蘭印、佛印等の電力開発に挺身した幅広い電力土木の先達として、その自分史を克明に、家族の為、国の為に残された偉業に心打れたからである。大正2年東大土木を卒業後、昭和26年死亡するまで38年間、電力土木の歴史を国内外に築き上げた先達の一人であると共に、知久徳の親子二代電力界に挺身した事も感銘深い。



知久清之助の足跡

2) 伊藤 令二



昭和60年3月 家族揃って

イ) はじめに

平成4年6月土木史研究発表会が埼玉大学で行なわれ、私が電力土木史(その11)を発表した際、伊藤学先生(東大名誉教授、埼玉大学教授)にお会いして父伊藤令二が自叙伝「思ひ出の記」を発売して、富山県電気局時代の有峰ダム建設所の勤務時代の事も書いており、伊藤学先生も富山大学付属小学校に通ったので富山が懐かしいとの話がでて一冊送っていただいた。

土木史研究No.11に伊藤令二の略歴が私が記載したので、今回は「思ひ出の記」を中心に一生を土木事業、特に日本のダムの代表的な工事-有峰ダム、奥只見ダム、御母衣ダム(日本最初のロックフィルダム)に挺身した伊藤令二を人物史第2号にとりあげた。

ロ) 伊藤令二の年譜

明治35年9月2日 金次郎、きくの五男として誕生(静岡県焼津市)

大正9年3月 静岡県立藤枝農学校卒業

大正10年3月 私立豊山中学校(東京)四学年終了

大正13年3月 第八高等学校理科卒業

昭和2年3月 東京帝国大学工学部土木工学科卒業

昭和2年4月 内務省土木試験所雇

昭和7年7月 内務技師横浜土木出張所勤務

昭和9年6月 内務省清水港修築事務所主任

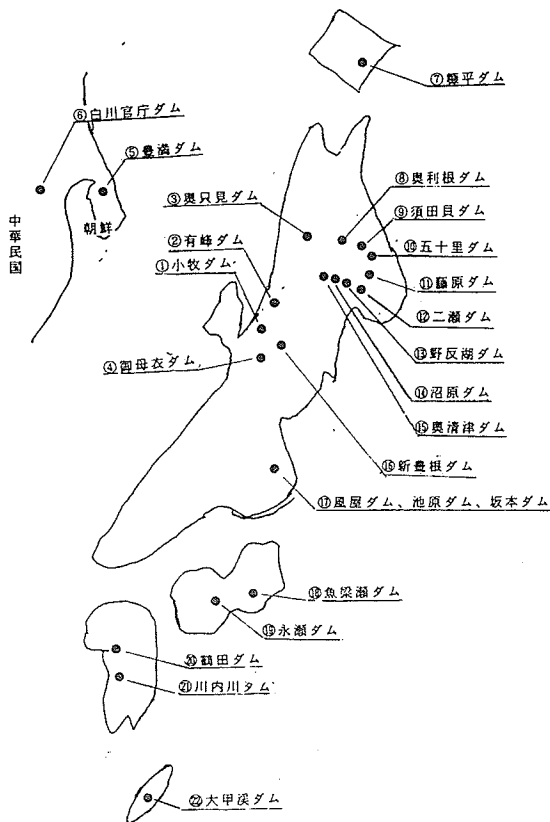
昭和11年5月 富山県土木技師兼道路技師

富山県電気局囑託(有峰発電所工

事堰堤主任及電気局土木課工務係長を歴任)

昭和16年 8 月 内務技師東京土木出張所勤務
 昭和16年10月 内務技師鬼怒川改修事務所長
 昭和17年 3 月 国土局河川課勤務。水力及河水統制係を担当
 昭和18年 1 月 満洲国へ出張
 昭和19年 2 月 中華民国へ出張
 昭和23年 1 月 総理庁技官、建設院勤務
 建設院水政局利水課長兼砂防課長
 昭和23年 7 月 建設技官、河川局利水課長
 昭和23年11月 建設省中部地方建設局長
 昭和24年 9 月 建設省中国、四国建設局長
 昭和25年12月 日本学会協議会員に当選
 昭和25年12月 国際大ダム会議(インド)出張
 昭和27年 5 月 工学博士
 昭和27年12月 建設省関東地方建設局長
 昭和28年12月 東京電力(株)入社
 参事、建設部次長
 昭和29年 7 月 東京電力(株)建設部長
 昭和29年10月 奥只見建設所長
 昭和31年 7 月 東京電力(株)退職
 電源開発(株)土木部長
 昭和32年 3 月 電源開発(株)御母衣建設所長
 昭和34年 5 月 電源開発(株)土木部長(役員待遇)
 昭和34年12月 台湾へ出張
 昭和35年 2 月 電源開発(株)理事
 昭和36年 6 月 国際大ダム会議(ヨーロッパ及びアメリカへ)
 昭和38年 3 月 水資源開発公団、ダム技術委員会委員
 昭和39年 2 月 電源開発(株)理事退任
 昭和39年 2 月 大豊建設(株)顧問
 昭和39年 5 月 開発コンサルタント(株)取締役社長
 昭和42年 4 月 埼玉大学理工学部講師
 昭和44年10月 日本ダム協会会長
 昭和47年11月 勲三等瑞宝章
 昭和51年 6 月 開発コンサルタント(株)取締役社長退職
 平成 2 年 8 月 死去 87才

伊藤令二の足跡



ハ) 東大3年の夏期実習に富山県庄川の小牧ダム建設工事現場へ行く。(昭和元年8月)
 当時、日本一のコンクリート重力ダムであった。所長は石井穎一郎で物部長穂東大教授と同期生。実習の指導は先輩藤井雄之助であった。
 同級生の伊藤信と2人で実習を終えて、2人はダムを造る東京電力へ就職しようと話しあった。卒業論文は「アーチダム」を書いた。

ニ) 富山県へ出向、有峰ダム建設事務所ダム主任となる。(昭和11年5月-16年8月)
 内務省清水港修築事務所長より富山県電気局有峰ダム建設事務所ダム主任となった。
 電気局土木課長は金野賢也、有峰ダム建設事務所所長は藤原琢爾であった。電気局電気課長は永井要蔵。電気局技師野際幸雄(女優野際陽子の父)であった。

有峰ダムは常願寺川支流和田川の上流で高さ110 m、体積70万 m^3 の当時日本最高の重力式、コンクリートダムである。ダムのコンクリートの打設は昭和14年より開始したが、昭和16年日本発送電に委譲され、伊藤令二には16年8月内務省東京土木出張所へ転勤となった。〔筆者は昭和17年9月日本発送電(株)北陸水力事務所建設課設計係へ入社し、設計係長代理 大橋康次(元北海道電力副社長)のもとに有峰ダム建設事務所の業務特に水資料の検討等も担当した。昭和19年6月、セメント等の資材不足の為、工事中止となった。中止当時コンクリート高さ5 m打設済みであった。〕

昭和31年北陸電力有峰ダム建設所(所長 大林士一)及び常願寺水系発電所建設所(所長 和沢清吉)で有峰ダム工事、和田川第一、第二発電所等10発電所28万kWの工事が再開された。

有峰ダムは既打設コンクリートを中に含んで、高さ140mの重力コンクリートとして昭和34年完成し、引き続き昭和53年増設工事を着工、常願寺水系建設所(所長高瀬博)で有峰第1、第2、第3等40万kWの発電所が昭和56年運転開始した。〕

ホ) 内務省東京土木出張所鬼怒川改修事務所長時代

五十里ダム調査担当(昭和16年10月)

当時、ロックフィルダム建設の調査をしたが、その後、ダム位置を下流に変更、重力ダムで建設した。

ヘ) 朝鮮の水豊ダム視察、満洲土木学会に出席のため立ち寄る(昭和18年1月)

鴨緑江で建設中の水豊ダム(建設所長 学友松尾次六)見学

ト) 中華民国北支白川の官庁ダム現地調査(昭和19年2月)

商工省の高畑政信と2人出張

工務総署(田淵壽郎技監)の担当者(秋草勲)案内。

また北京の華北電業担当者(落合久四郎)の案

内で北支の電力建設を視察した。

チ) 「堰堤工学」を出版(20年3月～22年2月)
有峰ダムの建設計画、実施の経験を中心として、ダムに関する本を出版した。

リ) 建設省利水課長時代矢木沢ダム調査、計画(昭和23年)

矢木沢ダム担当(小池誉)

その後、水資源公団で完成。

ヌ) 建設省中国四国地方建設局長時代、永瀬ダム完成(昭和24年)

四国物部川工事事務所(永瀬ダム)所長 山崎博、土木課長 豊田栄一。ほかに、中村慶一、堀内弘顕、池上雅夫等担当。

重力式コンクリートダム 高さ85m。

ル) 昭和天皇四国地方御巡幸の際、渡川(四万十川)改修工事につき説明(昭和25年3月)

現在、渡川流域の発電所7ヶ所、最大出力4万kW。今後尚20万kW以上の開発が可能であると説明申し上げた。この時、陛下御年48才。伊藤令二は47才であった。

オ) 日本学術会議会員に当選(昭和25年12月) 地方区、中国四国地区の第五部(工学関係)に当選。

現在、長男 伊藤学 日本学術会議会員で親子二代 会員である。

ワ) 山口県佐波川ダム工事の委託を受けた。(昭和25年)

コンクリート重力ダム、工事事務所長(平田正二) 工事担当、増岡康治、伊達克己。

カ) 東大から工学博士を授与(昭和27年5月) 論文「太田川洪水の出水解析と洪水予報」

ヨ) 建設省関東地方建設局長時代

五十里ダム(鬼怒川)、藤原ダム(利根川)、二瀬ダム(荒川)等を指導した。

タ) 東京電力へ入社、建設部次長(昭和28年12月)
先輩萩原俊一氏の推薦で、東京電力(株)へ入社。
大学時代に憧れた東電へ27年目で初志貫徹した。
建設部次長を拝命。29日7月建設部長となる。
須田貝ダム(利根川上流)、〔コンクリート重力
式の大ダム及び我が国初めての地下大発電所工
事〕及び奥利根建設所(所長 鈴木忠男)並び
に野反湖ダム(群馬県、新潟県境)建設所(所
長本間徳雄ロックフィルダム高さ30m)の3ダ
ムを在任中、完成した。

レ) 電源開発(株)へ出向、奥只見建設所長となる。
(昭和29年9月)
奥只見ダムは当時日本一の大ダム。コンクリー
ト重力式高さ 155m。堤体積 170万 m^3 。貯水量
6億 m^3 。(現在でも日本一)発電所地下式。出
力36万kW。

ソ) 東京電力退職。電源開発(株)土木部長となる。
(昭和31年7月)
電源開発総裁。小坂順造 後 内海清温。
土木担当理事 斉藤三郎 後 永田年(佐久間
建設所長)土木部長 伊藤令二
御母衣建設工事と奥只見建設工事の請負入札を
行う。

ツ) 電源開発(株)御母衣建設所長(昭和32年3月)
ロックフィルダム高さ 131m、ダム体積 800 m^3
当時としては日本では画期的な大ロックフィル
ダムであった。
発電所(地下)出力35万kW、貯水量4億トン。
ダム工事間組担当。
電発(株)ダム主任 浅尾格。工事中に伊丹康夫
(大型建設機械の運用)三国英四郎(堤体コア
ーの土質の問題)浅尾格(ロックフィルダムの
技術的問題)の三人が博士号を東大から授与さ
れた。

ネ) 昭和34年5月本社土木部長(役員待遇)に転
勤。後任の御母衣建設所長は浅尾格となる。

ナ) 台湾へ出張(昭和34年12月)

台湾電力大甲溪の達見ダムの建設計画について助
言。

ロックフィルダム。

日月潭ダム。嘉南大圳ダム(八田与一が心血をそ
そいだ農業用ダム、八田堰堤と名付けられている。
東大土木出身)等を視察した。

ウ) 電源開発の理事となる(昭和35年2月)

奥只見、田子倉、御母衣の三大プロジェクトが相
ついで完成した。

(理事在任中の建設工事)

- 1) 西吉野川第1、及び第2発電所(熊野川筋、
十津川及び北山川)並びに猿谷ダム、風屋ダム、
二津野ダム
- 2) 池原ダム(北山川筋)
アーチダム及び池原発電所(35万kWの混合揚水
発電所)
- 3) 七色ダム(北山川筋)小森ダム及び七色発電
所、小森発電所
- 4) 坂本ダム(アーチダム)(北山川筋)及び尾
鷲第一、尾鷲第二発電所
- 5) 北海道糠平ダム(十勝川)
糠平発電所及び芽登第1並びに芽登第2発電所、
足寄発電所。
- 6) 四国、魚梁瀬(やなせ)ダム(奈半利川)及
び魚梁瀬発電所並びに二又発電所、長山発電所。
- 7) 九州、瀬戸石発電所(球磨川)及び川内川第
一発電所(出力12万kW)及び川内川第二発電所
(1万5千kW)鶴田ダム(高さ 117m、重力ダ
ム)建設省で施工。
- 8) 新豊根揚水発電所(天竜川水系)
高さ 117mのアーチダム(上池)、佐久間貯
水池(下池)出力 112.5万kWの揚水発電所。昭
和48年完成。

9) 沼原揚水発電所(栃木県那珂川) 深山ダム
(農林省建設) 下池 沼原調整池 上池
落差 528m、出力67.5万kWの揚水発電所。

10) 奥清津揚水発電所(新潟県信濃川の支流清津川)
落差 500m、出力 100万kW
昭和53年発電開始等の工事の指導をした。

さらに海外の技術協力として、

1) 南米ペルー国、タクナ開発事業
900mの落差、3.5万kW。昭和42年に完成。

2) トルコのハサン、ウールル開発計画
高さ175m、貯水量11億m³の大ロックフィルダム50万kWの発電を行う。
昭和47年着工、第1期工事25万kW、昭和54年に完成。建設所長 細谷浩正 自動車事故で殉職。

3) タイ国、シーナガン開発計画
昭和37年頃より協力。高さ 140mのロックフィルダム。総貯水量 177億m³ 最大72万キロの発電を行う。昭和49年着工、55年第1期工事(出力36万キロ) 完成。

ム) 国際大ダム会議(イタリアのローマ)に出張
(昭和36年6月)
団長 永田年、副団長 伊藤令二日本より21名参加。ヨーロッパ、アメリカを視察。

ウ) 電発理事退任(昭和39年2月)
後任の土木担当理事に浅尾格就任。

イ) 大豊建設に入社顧問(昭和39年2月)

ノ) 開発コンサルタント社長となる(昭和39年5月)
大豊建設の傍系開発コンサルタントの社長となる。

オ) 埼玉大学理工学部講師となる(昭和42年4月)

ク) 日本ダム協会会長となる(昭和44年10月)

ヤ) 勲三等瑞宝章叙勲(昭和47年11月)

マ) 開発コンサルタント(株)取締役社長退任。73才。
12年間社長をつとめる。

ケ) 水資源公団、ダム技術委員会委員となる
(昭和38年3月)

理事 阪西徳太郎の発案。公団の設計、施工するダムについての重要事項について、その道の権威者の意見を聞くためである。毎年1回、計画、施工中のダムの現場へ出張してダムの地質、計画施工方法等について公団側の計画の説明をきき、これを審議検討した。

委員

岡本舜三(構造物の耐震)
国分正胤(コンクリート)
広田孝一(地質)→村 幸雄
畑野 正(設計の理論家)
伊藤令二(現場経験)
山本三郎(公団前総裁)
望月邦夫

検討したダム

1. 下久保ダム(重力式コンクリート)
利根川支流神流川
昭和41年、43年の2回
2. 高山ダム、青蓮寺ダム、室生ダム
(奈良県、三重県)
3. 布目ダム(奈良市の水道用水) 木津川支流布目川
重力式コンクリート、R.C.D. 工法
4. 草木ダム(渡良瀬川)
重力式コンクリート
5. 矢木沢ダム(利根川水系)
アーチダム

6. 奈良俣ダム（利根川上流）

昭和55年現地視察

高さ 155m、堤体積

1,310万 m^3 の大ロックフィルダム

7. 阿木川ダム（木曽川支流阿木川）

昭和53年

ロックフィルダム

8. 味噌川ダム（木曽川上流）

昭和62年現地視察

ロックフィルダム、高さ 140m

堤体積 650万 m^3

9. 浦山ダム及び滝沢ダム

（埼玉県荒川上流）

浦山ダム 高さ 155m

堤体積 170万 m^3 のコンクリート重力ダム

昭和55年現地視察

フ) 私の伊藤令二観

大学実習時代に富山県小牧ダムでダム工事を経験し、生涯をダム工事に挺身する事を決意して、東京電力へ就職する事を友人と話しあったのが、ダムとの出会いで、その後建設省に入って富山県へ出向し、有峰ダム主任の経験、さらに東京電力、電源開発に入って、奥只見ダム建設所長、御母衣ダム建設所長等、それぞれ当時日本一の規模の大工事に直接挺身して、最後には電源開発の理事として、国内外のダム工事に一生を捧げ、そのダムの業績は国内30数ヶ所に及び、国外は戦前の台湾、朝鮮、中華民国、さらに戦後のペルー、トルコ、タイ等の10数ヶ所に及び、昭和2年より昭和51年の50年に及ぶ、建設省並びに電力業界における足跡は、日本電力土木史のダム開発隆盛期における主力的な活躍のもと、多数の画期的ダムの設計、施工、特に大規模、重力コンクリートダム、アーチダム、ロックフィルダム及び地下発電所、揚水発電所の新技術開発等、後世に残した偉業の数々に敬服すると共に、長男伊藤学氏とともに、親子二代の土木関係の日本学術会議会員として、さら

に土木技術関係の指導者としての親子二代にわたる偉業に頭が下がる。

特に有峰ダムの関係で、富山市に居住した伊藤親子（昭和11年5月～昭和16年8月の5年間）の離任直後、富山の日本発送電(株)北陸水力事務所に入社し、電力界へ第1歩を踏み出した筆者が、最初に担当した業務が大橋康次設計係長代理（もと北海道電力副社長）のもとに、有峰ダムの水収支関係の仕事であり、その後富山に居住して一生を電力土木界に捧げた筆者の感慨は、特に伊藤令二に親近感を覚えると共に、その後、伊藤令二が小牧ダム御母衣ダム、奥只見ダム等、関係した各ダム発電所を見、今自叙伝「思ひ出の記」を読み返して、身近に伊藤令二の偉業を心に体に感得する事が出来る。

参考文献

1) 知久清之助自叙伝

2) 伊藤令二著「思ひ出の記」

1990年8月 第一書房

3) 電力土木技術協会「水力技術百年史」

1992年5月

（以上）